

## 地域・学校づくり部会

高木 勝正

### 震災・「教育改革」に学校はどう対応するか

今年度は、二回の部会を開きました。

一回目は、三・一一東日本大震災の際の学校現場の状況報告、地震・津波・原発の三つに視点を当てたレポート報告、東日本大震災の状況とスライドの視聴を行いました。東日本大震災のときに学校がどう動いたか、子どもたちの安全はどのように確保されたか、今、学校は子どもたちの安全確保のために、或いは、地域の防災拠点としてどう対応するのか、実際に東京で直下型の地震が起こったときには、現在想定している対応でよいのかなどが話し合いの視点となりました。

地震予知の研究が注目されている中、基礎研究に目が向いていない状況や津波災害後の復興に住民の合意形成が大事になつてくることや原発に関する情報の隠蔽されている部分と放射能の基礎知識の

必要性などが見えて来ました。

今、学校で放射線量の測定などがなされていきますが、給食や飲み水も含めた安全は誰が判断するのかということについて、「校長判断」ということで「学校責任」という形にされていることは、大いに問題があると思われれます。

二回目は、各地で進められつつある小中一貫教育と土曜授業の流れとその実態を話し合いました。多くの区市市において「教育ビジョン」という形でさまざまな「改革」がなされています。世田谷の「九年教育」と土曜授業実施までの過程の報告と、同じような施策を出している他区の状態を絡み合わせて考えると、一つの「改革」のやり方がわかってきました。

これだけの「改革」であるのに、一見、

強引な感じをさせず、三年くらいかけて試行して、広げていくようなやり方をとっていたり、実施については各学校に任せるとしながら、実際にはやらざるを得ない状況にしたりしているのです。これは、トップダウンの色合いを薄くして、反対を組織できないようにして「改革」してしまおうというものではないでしょうか。地域に対してもイメージのしやすいものにして、すんなりと受け入れさせてしまおうとあります。

部会に参加した若い栄養士からは、「(さまざまなことに)疑問を持たない、持てない、見えないでいるのが今の若者。『きれいごと』を出されたときに、教育現場にそぐわないことでも『これをやろう!』となってしまう」という発言がありました。同じことが保護者や地域住民にも言えることで、「きれいごと」を出されたとき、本質がわからないままに流される「改革」になつてしまわないため、にどのように地域と学校づくりを進めていくか、さらに研究を進めていきたいと思えます。

(墨田・押上小)